

成川式土器の細分編年試案

池 畑 耕 一

1. はじめに

鹿児島県の弥生式土器は、かつて大隅式土器と薩摩式土器とに大きく二分され、弥生時代後半の土器として薩摩式土器が位置づけられていた。1958年に行われた山川町成川遺跡の調査以来、薩摩式土器は成川式土器と呼ばれている。この成川式土器は、県内各地で多数の出土が知られ、もっとも目につき易い土器であるが、その時期設定について近年、種々様々な受けとめ方がされている。例えば1974年に乗安和二三氏は、前年の考古学界の動向のなかで『従来弥生時代後期終末とされながらも、その実年代について問題を含み、しばしば議論されてきた南九州の成川式土器について最近その実年代を5世紀中葉とみることに落ちついてきたようである。』と記しており、逆に1979年に橋口達也氏は『南九州の後期後半の土器には、いわゆる成川式土器というものがあり（省略）近年鹿児島では、成川式に須恵器が伴うとの論議があるが、須恵器を伴う段階の土師器を含む時期の地方色豊かな土器までも、成川式土器と認定しているようにみえる。やはり、成川式土器は、北九州西新式、中九州野辺田式、東九州安国寺式と同様、下限には若干土師器の範疇に入るものがあるにしても、弥生後期後半～終末のものとして認定し、それ以後のものは成川式土器からは分離して追求すべきであろう』と記した。このように、その時期決定には弥生時代後期～終末期とする意見と、古墳時代とする意見がある。^(注1)^(注2)

ところで、成川式土器とはどうしたもの^(注3)を指しているのか。この問題についても、橋口氏の指摘どおり、広い範囲のものを指しているのが今日の状況である。砂粒子を多く含み、褐色あるいは黄褐色を呈し、軟質に焼けているのを成川式土器とするが、実際には器形・胎土・焼成度・色調などにも色々のものを含んでいる。もともと成川式土器とは、成川遺跡の報告書で提示されたものを指している。ところが、成川遺跡の性格自体が埋葬地であったために、その定義はいまいなものとなってしまった。例えば、『この種の土器に対して、われわれは従来指宿上層式土器と称していたが、指宿下層式土器である縄文式土器を、単に指宿式土器と称するようになったので、本形式土器を改めて、成川式土器と呼ぶことにしたい。』とされている。ところが、京都大学の報告による指宿上層式土器のかめ形土器は、口縁部が直立し、口縁下部に一条の突帯を有するものであるが、こうしたかめ形土器は成川遺跡に出土していない。ただ壺形土器には両者に共通するものがある。したがって、成川式土器は広い範囲の、つまり長期間の土器を一括してしまう結果となった。すなわち、かめ形土器はあけ底の脚台を有する点は共通するものの、口縁部が外反してくの字形を呈するものと、口縁部が直立するものとに二分される。壺形土器も丸底を呈するものと平底を呈するものとに分けられ、小型壺形土器も同様である。高環形土器も口縁部が外反するものと、環部が塊形を呈し丹塗りのされるものとに分けられる。この二大別は、今日では時期差によることがはっきりし

てきている。そしてまた、成川式土器は、その以前に呼ばれていた薩摩式土器とまったく同様のものを指していることが明らかである。

このように成川式土器（＝薩摩式土器）は広い範囲の土器を指しているが、この細分化についても古くより試みられてきた。まず、1952年、河川貞徳氏は鹿児島市笹貫遺跡・同県立医大遺跡・金峰町中津野遺跡・根占町千束遺跡などの土器を紹介し、笹貫遺跡・県立医大遺跡・一の宮遺跡・千束遺跡の土器を3様式、中津野遺跡の土器を4様式と分けた。1971年には出口浩氏が吹上町花熟里遺跡の土器、主としてかめ形土器と壺形土器をⅠ類とⅡ類に分けた。^(注7)さらに1972年、出口氏はこれに吹上町中原遺跡の土器を加え、主としてかめ形土器の変化からⅠ類→Ⅱ類という変化を呈示した。この出口編年は型式的視点からとらえたものであったが、その後に行われた吹上町入来遺跡・^(注9)同辻堂原遺跡等の調査はその正しさを立証した。一方、河川氏は松の尾遺跡・大原宮遺跡・千束遺跡などの調査報告で、その細分化を精力的に試みられている。1976年、辻堂原遺跡の調査が行われ、^(注10)成川式土器をもつ住居址を多数検出した。そして、1977年に発行された報告書で筆者らは、これをⅠ類とⅡ類に分けたが、これは出口氏のかめ形土器を主としたⅠ類・Ⅱ類^(注11)に他の器種を加えたもので、Ⅰ類を4世紀頃、Ⅱ類を5世紀～6世紀のものとした。また、1978年に開かれた鹿児島県考古学会の研究発表会で筆者は、Ⅰ類をさらに2分する案を発表した。^(注12)1978年、平田信芳氏は始良町萩原遺跡出土のかめ形土器をA類～G類と7種類に細分し、形態的・網位的にその編年を試みている。そして1979年には準人の土器としてこれを古墳時代の土器と位置づける。^(注13)

^(注14)成川式土器が大きく2分されることは、以上のように多くの論考によって発表され、また近年の発掘資料によって立証されている。しかし、その分類のほとんどは個々の遺跡の発掘調査報告で示されているために、成川式土器を広い視野の中でとらえることが困難な状況にある。ここでは今日まで一括資料としてとりあげられた土器を紹介し、その分類を試み、さらに新旧関係、年代的位置づけにまで言及し、大方の御指導・御批判を仰ぎたいと思う。

2. 一括資料の紹介

(1) 加世田市村原（柵ノ原）遺跡の住居址^(注15)

① 3号住居址

2.67m×2.12mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・鉢形土器・埴形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反し、頸部内面には稜をもつ。低い脚台が付き、内外面ともへらなで整形で仕上げる。壺形土器は頸部が細くくびれ、口縁部は強く外反する。なで肩で腹中心部には貼り付け突帯が巡る。端部のすれ違う一条の三角突帯に密にきざみが付されるものと5本のきざみの付されない三角突帯が付くものがある。安定した平底である。鉢形土器は口縁部が直立して立ちあがるもので、丸底に近い平底である。埴形土器は外に開きながらまっすぐ立ちあがり、低い高台が付く。これらの他に円形の凹穴を付した軽石製品が2点みられる。

② 5号住居址

3.68m×3.0mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・マリ形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反し、頸部内面には稜をもつ。口縁部が強く外反し、逆し字形に近いものもある。最大径は口縁端部にあり、肩も張らずゆるやかに底部に至る。低い脚台がつく。壺形土器は頸部が細くくびれ、口縁部は強く外反する。胴中心部にはきざみの付された三角突帯が巡らされ、安定した平底である。マリ形土器は口縁部が内彎する。他に敷石と砥石が出土している。

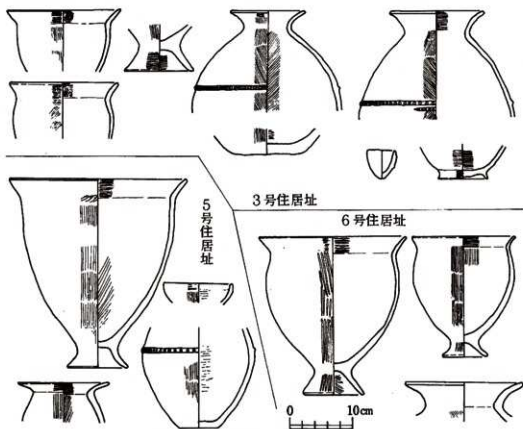
③ 6号住居址

5.05m×3.95mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反し、口縁内面には稜をもつ。頸部上半部がややふくらみ、低い脚台が付く。外面整形はへらなでのものとハケなでのものがあり、内面はハケなである。壺形土器は頸部で細くくびれ、口縁部が強く外反する。

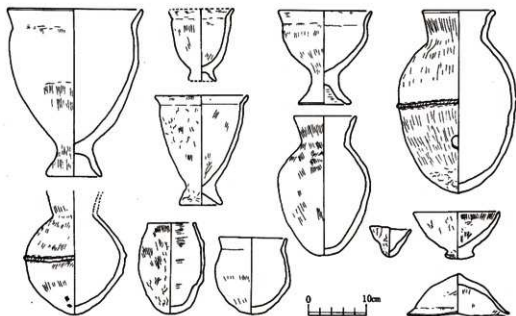
(2) 金峰町中津野遺跡の土城

径5m内外の豎穴で、さらに中央部が落ち込んでおり、住居址の可能性もある。完掘されていないが、この中央の落ち込みより40個以上の完形土器が出土している。



第1図 村原(梶ノ原)遺跡の一括資料

かめ形土器はやや内反するか、あるいは直立しながら頸部がくびれ、口縁部がくの字状に外反する。頸部内面の稜線ははっきりせず、底部には中空の脚台を有する。壺形土器の底部は丸底である。器形は胴部が張り球形に近いものと、長胴形のものがある。頸部でくびれ、口縁部はわずかに外へ開きながらまっすぐ延びる。胴部には細い矩形の貼り付け突帯が付されるものもあり、これには左下がりのきざみが付される。長胴形の器形を呈し、口縁部が内反しておわる無頸壺もある。鉢形土器には脚台のつくものと、つかないものがある。脚台のつくものは深い鉢部を有し、頸部からいったん内反し、口縁部は開きながら端部に至る。脚台のつかないものはまっすぐ口縁部に延び、底部は外反して端部に至る。丸底を呈し、直に口縁に至る小型土器もある。蓋形土器は逆鉢形を呈し、頂部は丸みをもって、裾部は外反しながら端部に至る。



第2図 中津野遺跡土器の一括資料

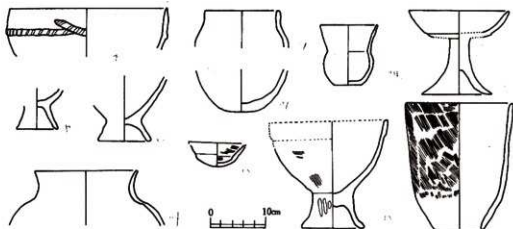
(3) 吹上町入来遺跡6号住居址

(注17)

3.2m～3.6m×3.9mの方形住居で、中央に炉跡を有する。かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高杯形土器・こしき形土器が出土しており、須恵器の蓋3・提瓶1が共伴する。

かめ形土器は開きながら口縁部までまっすぐ延びるが、端部でわずかに内彎する。口縁端部が薄くなるものもある。輪づみにより作られるが、口縁下のつなぎ目に一条の絡縄突帯を巡らし、その結節点から突帯の端が上向きに分岐する。あげ底の脚台が付くが、割に低い。外面はハケなどで仕上げられ、暗褐色を呈す。壺形土器は肩の張る胴部に外反し端部の薄くなる口縁がつくものと、肩が張らず直立する口縁をもつものがあり、底は安定した丸底である。埴形土器は上半部が張った胴部に、開きながら端部に至る長い口縁部をもつ。精製された粘土を用い、口縁端部は薄く、安定し

た平底である。鉢形土器は脚台のつくものとつかないものがある。脚台のつくものは口縁部に肥厚帯を巡らし、開きながらまっすぐ端部に至る。脚台のつかないものは丸底で、口縁部が外に強く屈曲する。高坏形土器は浅い坏部に柱状の脚部がついたもので、精製された粘土を使用している。坏部は底部と口縁部との境に明瞭な凹線をほどこし、脚端部はゆるやかに外へ広がり、端部がうすくなる。黄褐色を呈し、研磨仕上げである。こしき形土器は口縁部に向かってわずかに開く円筒形を呈するが、底部に近く内側に屈曲して端部に至る。胎土は砂粒を多くまじえ、ハケ目の仕上げである。



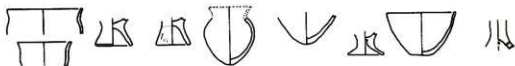
第3図 入来遺跡6号住居址の一括資料

(4) 吹上町花熱里遺跡3号住居址

(注18)

西側を削られているが、約 $\frac{1}{2}$ を残す最大幅 4.4 m の不定形住居址である。かめ形土器9・壺形土器2・鉢形土器2が出土している。

かめ形土器は長胴形の器形を呈し、口縁部がくの字状に外反する。頸部内面は稜をもたず、底部に中空あげ底の脚台がつく。外面・内面ともハケなで整形で仕上げる。壺形土器は肩部付近に最大径があり、肩部には一条ないしは二条の三角あるいは台形状の貼り付け突帯を付すが、この突帯にはきざみ目のみられるものもある。丸底を呈する。鉢形土器には完形品がある。口径 2.2.5 cm、高さ 1.4.5 cm を測り、安定した平底である。外反してまっすぐ口縁端に至るが、端部付近はやや内側に曲がる。



第4図 花熱里遺跡の一括資料

(5) 吹上町辻堂原遺跡の住居址と溝状遺構 (注19)

① 15号住居址

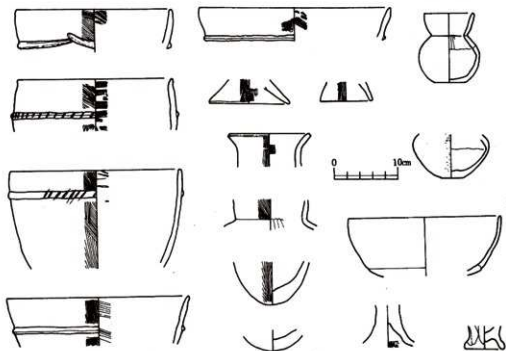
4.0m×4.1mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部が直立ないしは内彎する。丸みをもった貼り付け突帯はきざみのあるものとなひものがあり、突帯の結合する所は上にはねあがる。脚台は低く、外面・内面ともハケなであるが、内面はさらにへらなでを施すものがある。壺形土器は頸部から口縁が直立し、端部に近いところでは強く外反して端部には沈線がみられる。丸底である。埴形土器は精製粘土を使用し、輪轆み技法でつくる。外面と口縁内面はへら磨きがされる。口縁部は開きながらまっすぐ延び、最大径を頸部やや上半にもって、平底である。台付鉢形土器の脚台は低く、外面はへらで荒くかきなでである。高環形土器の坏部は塊形を呈し、口縁部と底部の接合部には浅い凹線がみられる。脚部は端部が強く外反するもので短い。外面はへら研磨、内面はへらなで、化粧土を塗布してある。

② 35号住居址

3.6m×4.3mの方形住居で、床面よりやや浮いた状態で多量の土器がみられた。かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器と、環(須恵器)がある。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反するもの、若干内彎するもの、直に立ちあがるものがある。口縁部が外反するものには頸部に貼り付け突帯のつくものと、つかないものとがあり、突帯には断面が三角形を呈するものとまぼこ形を呈するもの、きざみを有するものと有さないもの



第5図 辻堂原遺跡15号住居址の一括資料

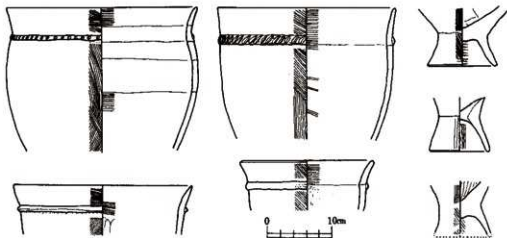
とがある。内彎するものと直に立ち上がるものには三角あるいはかまぼこ形の貼り付け突帯がつき、これには斜め方向のきざみ目のつくものとつかないものがある。脚台は低く小さいものと高く立ち上がるものがある。外面はハケなどで整形で仕上げ、内面は全面ハケなどで、上半部のみハケなどで、下半部はへらなどでものがある。壺形土器は口縁部が直に立ちあがるもの、開きながら端部に至るもの、強く外反するものがあり、端部は平坦あるいは丸みをもっており、端部に浅い凹線のみられるものもある。胴部には三条の三角突帯が付く。底部には平底に近い丸底、あるいは安定した平底がある。埴形土器は精製粘土を使用し、口縁部は開きながら端部が内曲するものと、開きながら直立するものがあり、頸部はくびれる。胴部は丸みをおびて、平底を呈する。外面は磨きに近いていねいななである。鉢形土器は埴状を呈し、脚台がつく。外面はハケなどで、内面はハケなどであとへらなどで仕上げたものがある。高坏形土器は精製粘土を使用し、丹を塗るものがある。坏部は埴状を呈し、底部とたちあがりの境に凹線を有するが、段をつくるものもある。筒部と胴部の境ははっきりせず、ゆるやかに広がりが端部に至る。須恵器の坏は受部が横に広がり、立ちあがりが高く、やや内傾する。

35号住居址はかめ形土器の脚台を30個体分も含んでおり、このことは2軒以上から土器が廃棄されたことを物語っている。したがって、時期的にも広い幅を考える必要があろう。

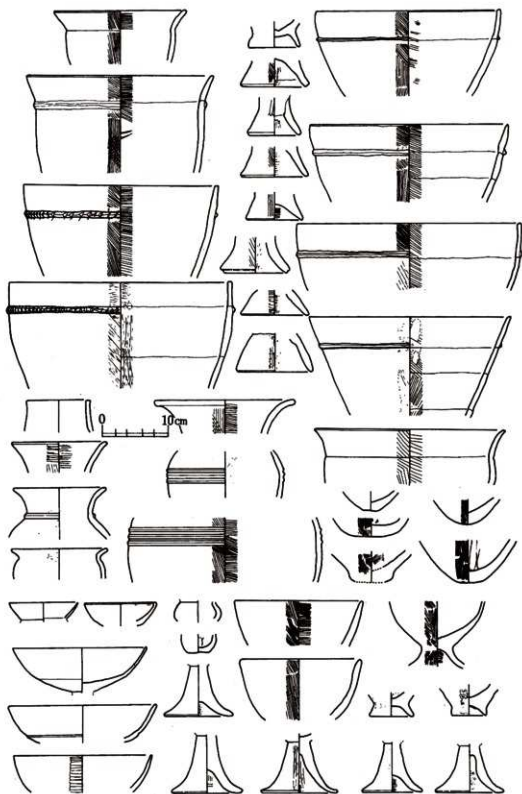
③ 55号住居址

3.9m×3.6mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器と、須恵器の高坏、および須恵器類似の土師器坏が出土している。

かめ形土器は底部から開きながら直に口縁部へ至るもので、口縁部はくの字状に外反するもの、若干内彎するもの、直に立ちあがるものがある。口縁下部に断面が三角形、あるいは半円形の貼り付け突帯が1条巡り、これには左下がりのへう刻みが施される。底部には脚台がつくが、概して低い。胴部と脚台の境にも断面半円形の貼り付け突帯を付すものがある。壺形土器は口縁部が



第6図 辻堂原遺跡35号住居址の一括資料(1)



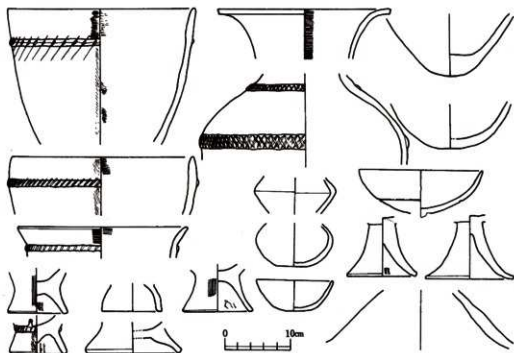
第7図 辻堂原遺跡35号住居址の一括資料(2)

大きく外反し、口縁端には1条の凹線がみられる。頸部と肩部には貼り付け突帯が付され、これには右下がり、および左下がりのへら刻みが加えられる。突帯は頸部・肩部とも断面が半円形であるが、肩部の突帯は幅広い。底部には丸底・不安定な平底・安定した平底がある。埴形土器は頸部が強く屈曲し、口縁は外に開く。胴部は肩が外に張り、ここの稜がはっきりしたものと、丸みをおびて不明なものがある。安定した平底で、精製粘土を使用している。鉢形土器はマリ状の形をしており、底部からやや開きながら口縁部へまっすぐ延びている。精製粘土を使用している。高環形土器も精製粘土を使用しており、環部は塊形を呈し、底部と立ちあがりの境に1本の沈線がみられる。脚部は端部が外に開き、筒部は短い。蓋形土器はなだらかに開きながら裾部にいくもので、調整はへらなどである。須恵器の高環は環部で、底部と立ちあがりの境に段をもち、立ちあがりに5条の波状文がある。土師器の環は受部が外に広がり、立ちあがりはまっすぐ上に延びている。

④ 58号住居址

5.5m×5.0mの方形住居で、68号住居址に切られているために出土した土器は少ない。かめ形土器・甕形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器がある。

かめ形土器はやや外に開きながら口縁部に至り、口縁部はまっすぐのびているが、若干外反するものもある。口縁下部には断面三角形のへら刻みを有する貼り付け突帯がみられるが、ないものもある。脚部は割に高い。甕形土器の口縁部は頸部から内側に傾斜し、ややあがった所で今度は外に屈曲する。頸部には段をもつ。胴部上半に断面半円形の貼り付け突帯があり、これにはへ



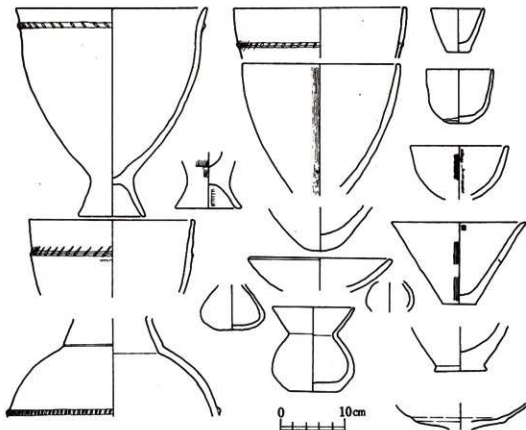
第8図 辻堂原遺跡55号住居址の一括資料

ら刻みが付される。底は丸底に近い不安定な平底である。埴形土器は精製粘土を使用し、口縁部は外に開きながらまっすぐのびる。胴部下半部に最大径をもち、安定した平底である。鉢形土器は小型のもの2種と、他に3種がみられる。小型のうち1種は平底を呈し、開きながら口縁端にまっすぐのびる。他の1種は平底で、やや直立ぎみに上へのびる。普通形のものにはマリ状のものと、平底を呈し外に開きながらまっすぐ上へのびるもの、浅い杯状のものとがある。高杯形土器は精製粘土を使用して、杯部は浅い境形を呈し、底部と立ちあがりの境に段をもつ。

⑤ 68号住居址

4.5m×4.0mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高杯形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部が直立ないしは内彎し、口縁下部に断面三角形ないしは半円形の貼り付け突帯が付される。突帯には刻みの付されるものとなないものがあり、突帯には端部が交わる所で右端のあがるものがある。脚台はほとんどが浅く、極単に浅くあげ底様のものもある。壺形土器は口縁部がまっすぐ立ちあがるものと、外に開きながらのびるものがある。頸部には左下がりのへら刻みをもつ貼り付け突帯が付されるものがある。胴部は肩が張るもので、肩部にも左下が



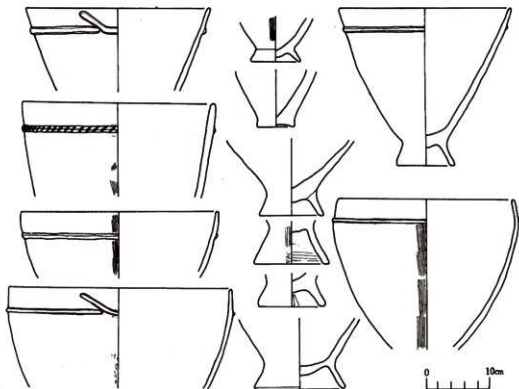
第9図 辻堂原遺跡68号住居址の一括資料

りのへら刻みをもつやや幅広い貼り付け突帯が付される。底部は不安定なものもあるが、多くは安定した平底である。一方、口縁部がやや外に開いて上にのび、最大径を胴部下半にもって不安定な平底のものが1点みられ、これは埴形土器の器形に類似する。埴形土器は底部近くに最大径をもち、内傾しながら立ち上がり、口縁部付近でやや外反するもので、わずかにあげ底である。鉢形土器は塊状を呈するものが多く、他に口縁部がくの字状に外反するものもある。底部は充実した平底のもの、浅いあげ底のもの、脚台のつくものの3種がある。高環形土器は丹塗りで、塊形の坏部をもつが、立ちあがりと底部の境には稜をもつものと段をもつものがある。脚部は短筒で、裾が外に広く開く。

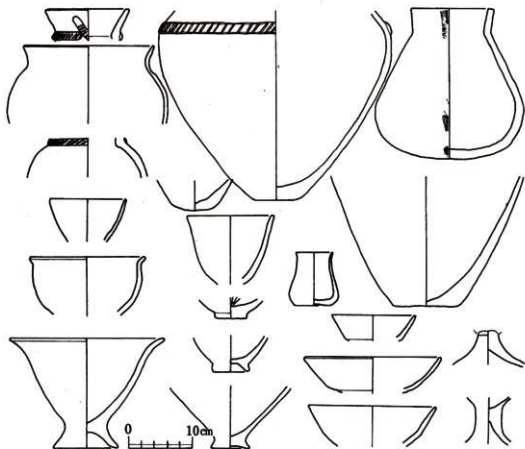
⑧ 70号住居址

切りあいの多くみられる区域にあり、80号・81号・85号・86号住居址などより新しい。4.0m×4.5mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反するもの、まっすぐ立ちあがるもの、内彎するものがある。口縁部のやや下部には断面が三角あるいは半円形の貼り付け突帯がみられ、これには左下がりへのり刻みのあるものもある。脚台は低い。壺形土器は、胴部中央付近に最大径をもち、頸部に段をもって、口縁部は強く外反する。底は小さい平底が多く、丸底のものもある。最大径の



第10図 辻堂原遺跡68号住居址の一括資料(1)



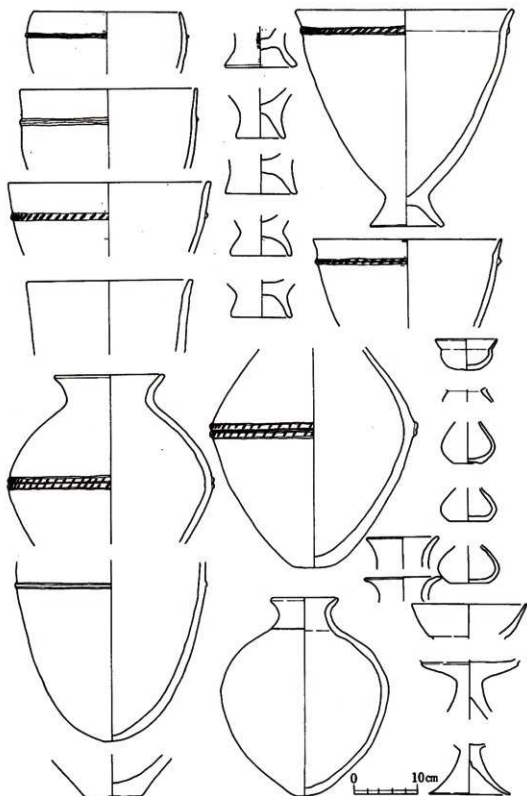
第11図 辻堂原遺跡68号住居の一括資料(2)

部分には1～3条の隣接する断面半円形の貼り付け突帯がみられ、2条・3条のものには左下がりのへら刻みが付される。埴形土器はややあげ底ぎみのものもあるが、安定した平底を呈し、最大径は底部のやや上部にあってどっしりとした観を呈す。頸部まで内傾してあがり、口縁は強く外側に反っている。鉢形土器は精製粘土を使用したもので、幅の広い丸底を呈す。口縁は外反するが、やや内傾ぎみである。高杯形土器は裾の広がる脚部をもつが、杯部には2種類がみられる。ひとつは碗状を呈し、底部と立ちあがりの境に凹線をもつ。他方は平たい底部をもち、立ちあがりとの境に段を有するが、口縁は強く外反するものと思われる。

⑦ 71号住居址

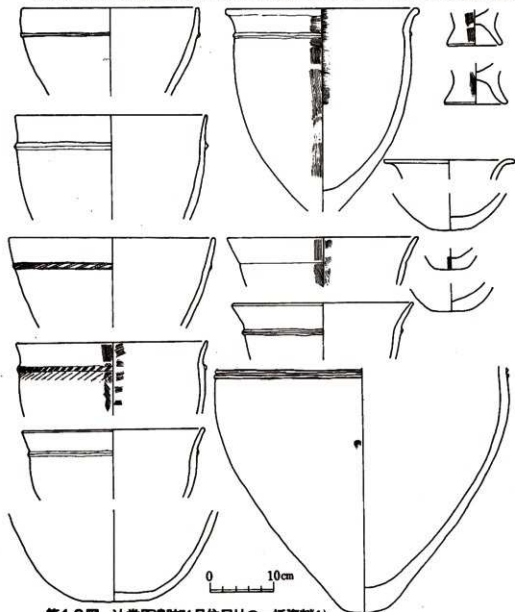
4.0m～4.7m×5.5mの方形住居で、55号住居・56号住居より古い。かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高杯形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部が若干外反しているものが主体をなし、他に開きながらまっすぐのびるもの、端部付近でやや内彎するものがある。口縁下部には断面三角形あるいは半円形の貼り付け突帯があり、これには左下がりの刻みが付されるものもある。刻みの施文具は板であるが、これは器面調整の施文具と同一のものと思われる。脚台は割に浅い。壺形土器は口縁部が強く外反し、

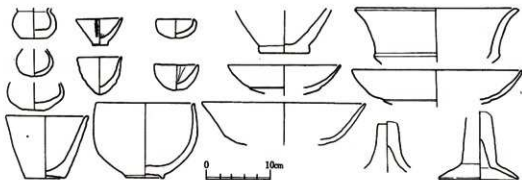


第12図 辻堂原遺跡70号住居址の一括資料

胴部中央よりやや上部に3条の断面三角形あるいは半円形の突帯が付される。底は安定した平底が主体をなし、不安定な平底のものもある。埴形土器は精製粘土を使用したもので、胴部中央に最大径をもって安定した平底のものと、球形で不安定な平底のものとがある。鉢形土器には塊状を呈しあげ底ぎみの高台を有するもの、やや外に開きながらまっすぐのび、ややあげ底ぎみの安定した平底をもつもの、外に開きまっすぐのびる器形で外に拡張する安定した平底をもつものなど、器形・大きさに幅をもっている。なお、外に開きながらまっすぐのび尖底をなす手づくね土器が1点みられる。高坏形土器の坏部は、立ちあがりと底部の境に稜をもつて、立ちあがり強く外反するものと、塊状を呈し、立ちあがり底部の境に段をもつものとのがある。脚部は筒部が



第13図 辻堂原遺跡71号住居址の一括資料(1)



第14図 辻堂原遺跡71号住居址の一括資料(2)

長く、強く外へ屈曲して裾部へ開くものと、筒部が短く、ゆるやかに裾部へ至るものがある。

③ 79号住居址

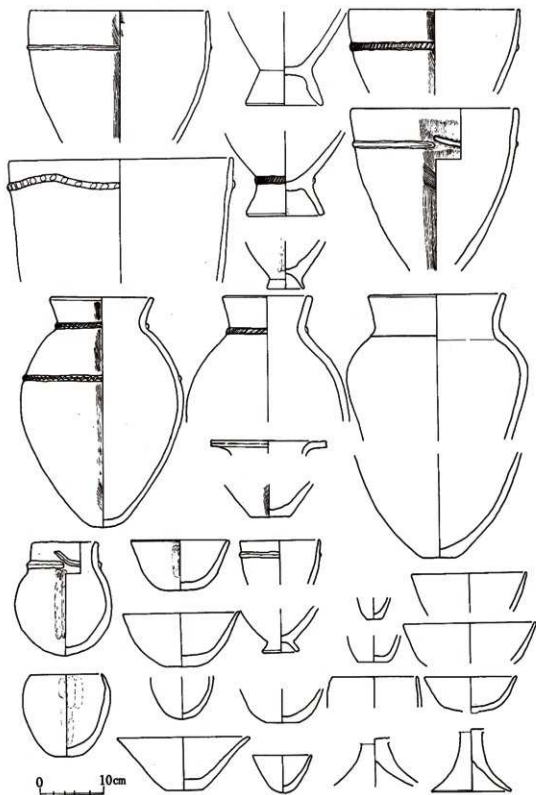
4.5m×4.0mの方形住居で、かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器が出土しており、他に須恵器のかめ、ノミ状石斧もある。

かめ形土器は口縁部が直立ないしは内彎し、口縁下部には断面三角形あるいは半円形・台形の貼り付け突帯が付される。これにはへらによる刻みの付されるものもある。脚台は概して高いが、低いものもあり、中央に突起のあるものもみられる。また、脚台の貼り付け部に左下がりのへら刻みが付される断面半円形の突帯を付すものがある。壺形土器の口縁は直立するもの、ゆるやかに外反するもの、強く外反するものがあり、頸部に断面半円形、あるいは三角形、台形の貼り付け突帯を有するものがある。肩部はあまり張らず、なで肩である。肩部にも断面半円形、あるいは三角形、台形の貼り付け突帯を有するものがあり、これには左下がり、あるいは格子状のへら刻みがみられる。底部は丸底のものもみられるが多くは安定した平底である。埴形土器は丸底である。鉢形土器の口縁はまっすぐ開いていくもの、まっすぐ立ちあがり内反するものなどがあり、深いものと浅いものがある。底は丸底に近いものもあるが、多くは安定した平底で、浅い脚台の付くものが1点ある。高環形土器は精製粘土を使用し、坏部は塊状を呈する。脚部は短筒で、ゆるやかに開きながら裾部に至るが、裾部付近で強く外へ屈曲するものもみられる。須恵器はかめの破片で、口縁下部ににおい三角突帯とくし描き波状文がみられる。外面は格子目、内面は同心円状の叩きがみられる。

④ 81号住居址

56号住居址・70号住居址より古い、5.0m×4.2m(+α)の方形住居である。かめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高環形土器が出土している。

かめ形土器は口縁部が直立、あるいはやや外反し、口縁下部には断面三角形あるいは半円形、台形を呈する貼り付け突帯が付される。これには左下がりのへら刻み、あるいはへら押しのつけられるものがある。脚台は割に高い。壺形土器の口縁部は、直立ないしは外反し、強く外反するものもある。肩はやや張って、底部は平底である。頸部に刻みのない三角突帯あるいは、左下がりのへら刻みのある断面半円形の突帯がみられるものもある。胴部にも1～3条の貼りつけ突帯



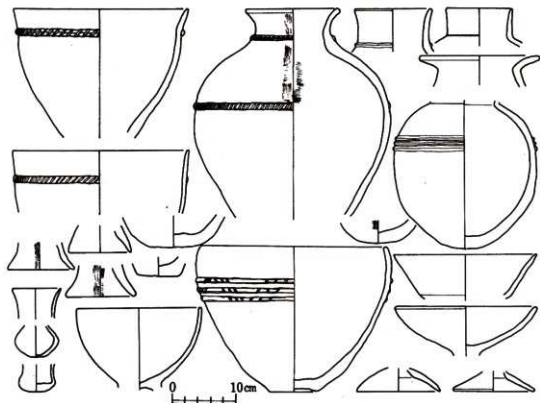
第15図 辻堂原遺跡79号住居址の一括資料

がみられる。埴形土器は底部のやや上部に最大径をもってゆるやかに外へ広がりがながら口縁部に至るものと、最大径を胴部中央をもって頸部がくびれ平底を呈するものがある。鉢形土器にも2種類がある。1点はマリ状の鉢に脚台のつくもので、他の1点はあげ底の底部から丸みをもって口縁部に至り、端部は内彎するもので、口縁近くに3条の断面半円形の貼り付け突帯が付され、これには綾杉状のへら押しが施される。口縁径29cm、器高23cmと大型である。高环形土器は坏部が塊状を呈し、脚部は筒部と強く屈曲する裾部とに分かれる。坏部は直線的に外へ開くものと、丸みをもつものがあり、立ちあがりと底部の境には段をもつ。裾部も倒坏状のものと直線状のものがある。

⑩ 溝状遺構1号

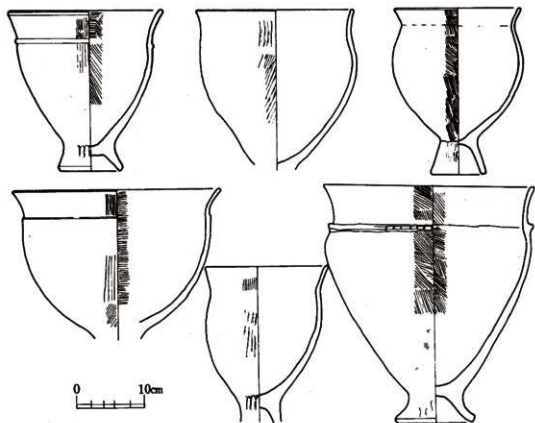
上面の幅2.5m～2.8m、底面の幅0.6m～2.0mを測るU字溝で、総延長68mを調査した。溝中には多量の土器が含まれ、その中にはかめ形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高环形土器・手づくね土器・蓋形土器・製塩土器がある。

かめ形土器はくの字状に外反する口縁部をもち、最大径を口縁部にもつものと胴部にもつものがある。頸部に断面半円形あるいは台形の貼り付け突帯を巡らすものがある。脚台には浅いものと、深いものがある。壺形土器は、口縁部が外反し、頸部で段をもつほどくびれ、丸底である。口縁部はほとんどが外反するものであるが、なかにはいくらか内に反りながら直立するもの、あ

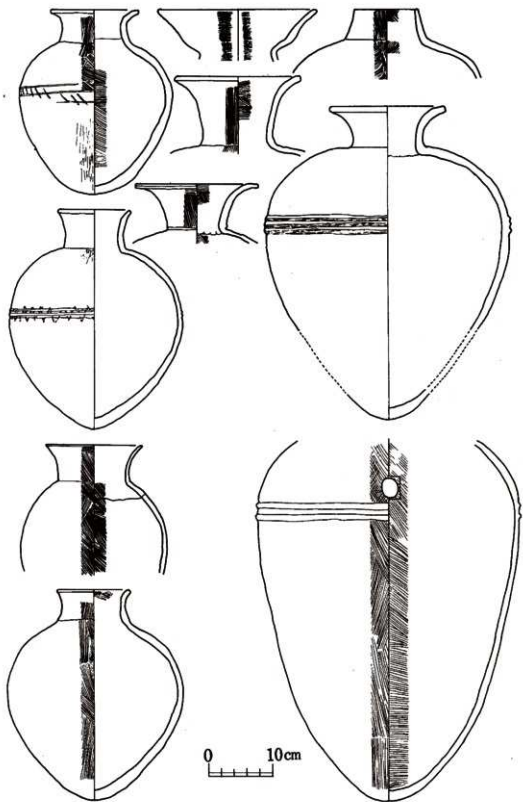


第16図 辻堂原遺跡81号住居址の一括資料

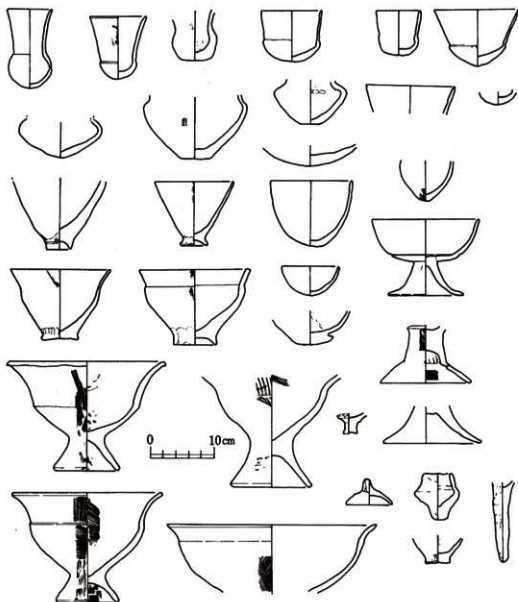
るいは二重口縁をなすものがある。胴部には三条の三角突帯を巡らすものがあり、突帯にはへら刻みがほどこされる。また、貼り付け突帯のかわりに沈線で表現するものもある。埴形土器の口縁は開きながら直立するものと、直に近く立ちあがるものがある。胴部に比べて口縁部は長い。胴部は中央よりやや上半に最大径をもつものと、頸部に近く最大径をもつものがあり、底部は丸底あるいは平底である。鉢形土器は境形をし、丸底あるいは平底を呈するものと、くの字口縁あるいは直立する口縁部をもち、低い脚台をもつものがある。高坏形土器は砂質胎土のものと、精製粘土を使用したものがある。砂質胎土のものの坏部は、口縁部が強く外反する深い鉢形を呈し、脚台を有するが、これには浅いものと深いものがある。精製粘土を使用したものの坏部は壇状を呈し、立ちあがりと底部の境には凹線を有する。脚部は筒部がなくゆるやかに外へ広がるものと、短い筒部を有し屈曲して裾部へいたるが、屈曲部に4つの小孔を有するものがある。手づくね土器は甕形土器のミニチュアで、平底を呈し、口縁は直に立ちあがる。蓋形土器は小形のもので、倒坏形のものに棒状の突起部を有する。製塩土器は太い棒状脚台を有するものである。



第17図 辻堂原遺跡溝状遺構1号の一括資料(1)



第18図 辻堂原遺跡溝状遺構1号の一括資料2)



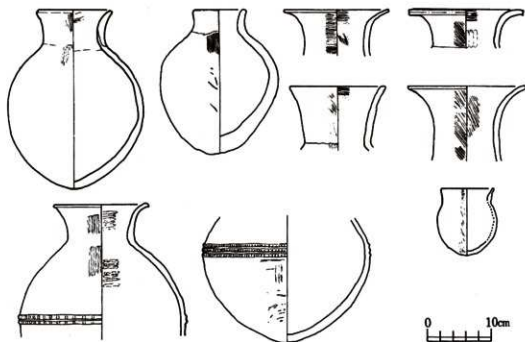
第19図 辻堂原遺跡溝状遺構1号の一括資料3)

⑪ 溝状遺構2号

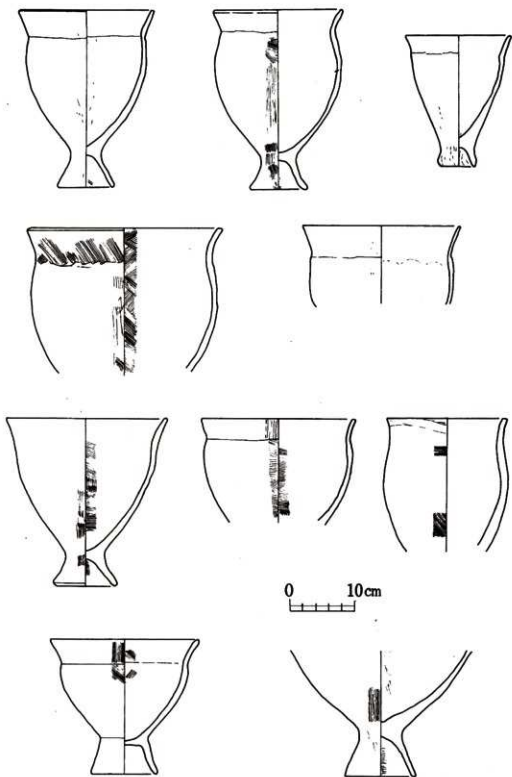
上面の幅1m、底面の幅0.1mを測る極単なV字溝で、総延長7.8mを調査した。中には多量の土器がみられ、かめ形土器・壺形土器・直口壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・蓋形土器がある。

かめ形土器は、くの字状に外反する口縁をもち、肩が張らない器形をし、割合に高い脚台を有する。頸部は口縁部から頸部へなだらかに移り、段をもたないものと、段をもつものがある。壺形土器の口縁は直立しながら端部が外反するものと、直立するものがある。頸部はくびれずに

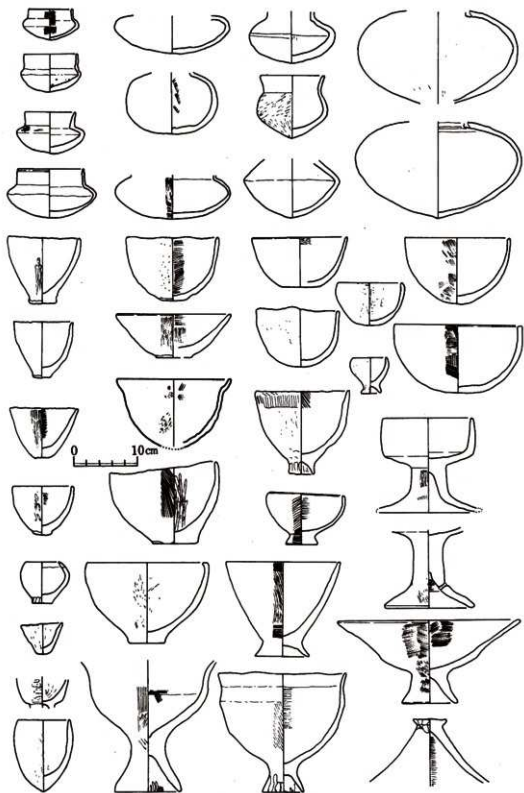
胴部の中央付近に最大径がある。胴部には2条ないしは3条の貼り付け突帯がみられ、これにはへらによる刻みが付される。尖底ないしは丸底である。直口壺形土器は口縁部が直に近く立ち上がり、胴部中央付近に最大径をもつ。底部は尖底あるいは丸底である。器高5cmの小型のものから、20cm以上にもなる大型のものまで大きさは不統一である。鉢形土器には底部によって3つのタイプがみられる。1タイプは低い脚台を有するもので、口縁部が内彎するもの・開きながら直立するもの・くの字状に外反するものがある。脚台の充実したものもある。2タイプは丸みをもった境形の器形を呈する。底部は丸く、コップ形をして尖底のものもある。3タイプの口縁は開きながら直立するものと、内彎するものがあり、平底である。高環形土器は砂質粘土を使用し、筒部を有するものと、脚台を有するものがある。筒部を有するものは平たい底部に直立する立ちあがり付き、短筒で裾へ広がる。筒部は長いものもあり、小孔を有するものもある。脚台を有するものは浅い杯部で、口縁は外へ大きく反っている。蓋形土器は外に張り出す平たいつまみをもち、なだらかに開きながら裾部にいたる。



第20図 辻堂原遺跡溝状遺構2号の一括資料(1)



第21図 辻堂原遺跡溝状遺構2号の一括資料(2)



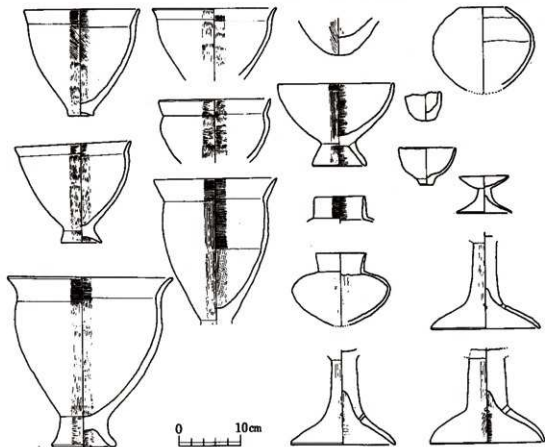
第22図 辻堂原遺跡溝状遺構2号の一括資料3)

(6) 始良町萩原遺跡住居址

(注20)

3.4 m～3.6 mの直径をもつ円形竪穴住居で、かめ形土器10・壺形土器2・直口壺形土器3・鉢形土器3・高坏形土器4が出土している。

かめ形土器は口縁部がくの字状に外反し、長胴形の器形を呈するが、胴部が張らずスマートなものと、口縁直径に対して器高が低く鉢形に近いものがある。口縁内面の稜線は明瞭で、浅い脚台が付く。外面調整は主として頸部より上が横方向、下がたて方向のへらなどで仕上げる。内面も同様である。壺形土器は丸みをおびた器形を呈し、丸底である。内外ともにたて方向のへらなどで調整である。直口壺形土器は口縁部と胴部が明確に段をもって分けられ、口縁部は端部が薄くなるもので、直に立ちあがるものとやや外反するものがある。最大径は胴部上半にあり、尖底に近い丸底である。精製粘土を使用し、ていねいなへらなどで仕上げであるが、内面の胴部上半には指頭のあとがみられる。鉢形土器は脚台のつくものとつかないものがある。脚台のつくものは、口縁端部がやや内反するもので、内外ともにていねいな横方向のへらなどで仕上げる。脚台のつかないものは2点とも小型で、1点は底部が下方に突き出しており、口縁部は外に広がりながらまっすぐ立ち上がる。他の1点は平底で手づくねの土器である。高坏形土器も小型のものと大型のものがある。



第23図 萩原遺跡の一括資料

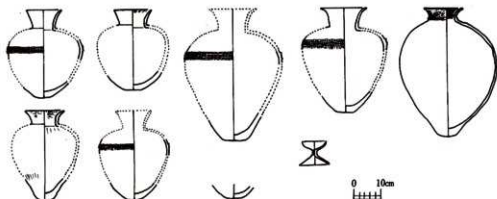
小型のものは浅い皿状の坏部に、裾が広く開く脚部がつく。大型のものは脚部のみで、脚柱と、端部がやや内曲しておわる裾部とからなり、脚柱と裾部との境に4孔が穿たれる。

(7) 吉松町永山遺跡円形周溝

(注21)

板石横石室をとり囲む円形周溝に9個の壺形土器と1個の高坏形土器がある。

壺形土器の口縁は頸部からやや外反しながらまっすぐ延び、頸部にきざみのある三角突帯を有するものもある。胴部中心に最大径をもつやや胴長の器形をし、胴部にはきざみを有する2条ないしは3条の三角突帯が貼付される。底部は平底であるが、不安定なものもみられる。高坏形土器は塊状の坏部をもち、短い筒部から裾は広く開く。口縁径1.6 5cmに対し、脚端径1 4.8cm、器高1 1.1cmとどっしりしており、精製粘土を使用している。



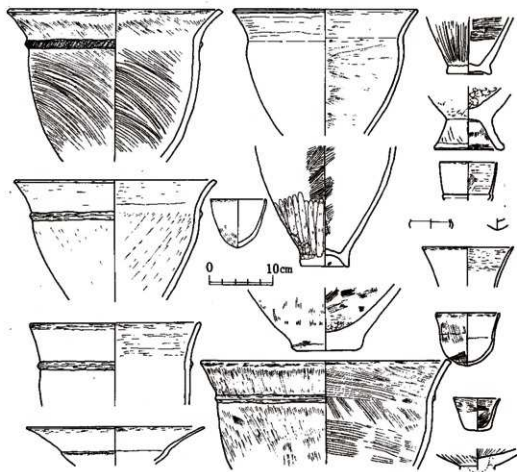
第24図 永山遺跡の一括資料

(8) 溝辺町東原遺跡の住居址

(注22)

4.5m×4.9mの方形住居よりかめ形土器8・壺形土器1・埴形土器3・鉢形土器3・高坏形土器2が出土している。

かめ形土器は肩部が張らず、すんなりと底部にいたり、口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は丸みをもつものと、角ばっているものがある。頸部には断面三角形の貼り付け突帯を有するものと、ないものがあり、貼り付け突帯には左下がりの布目押圧のみられるものがある。底には脚台を有するが、これには深いものと浅いものがあり、あげ底きみのものもある。壺形土器の底部は平底で、直線的に外へ開いて上方へ延びる。埴形土器の口縁部は外反して端部がうすくなるものと、やや外へ開くがほぼまっすぐ延び、端部を丸く収めるものがある。口縁部は胴部に対して長く、口縁部と胴部の境には段を有する。胴部は丸みをもっており、尖底である。鉢形土器は平底でしだいに外へ開きながら端部がうすくなっておわるもの、丸底で口縁部と胴部の境にやや屈曲するところがあって小型壺の様相を呈するもの、丸底で長胴形を呈し口縁部はまっすぐ立ちあがるものがある。高坏形土器の口縁は底部と立ちあがりの境に段を有し、立ちあがりはやや外反しながら端部に至る。



第25図 東原遺跡の一括資料

3. 分類

先に記したように成川式土器は大きく2つに分けることができる。そして、それはまた2式に細分化できる。それを仮に成川Ⅰ式・成川Ⅱ式・成川Ⅲ式・成川Ⅳ式と呼ぶことにし、概略について記してみる。

① 成川Ⅰ式

成川Ⅰ式と呼ぶ土器は成川式土器の中でもっとも古い一群で、辻堂原遺跡溝状遺構2号出土の土器で標式とする。

器種にはかめ形土器・壺形土器・直口壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・蓋形土器がある。

簡単にその特徴を記すと、かめ形土器はくの字状に外反する口縁部をもち、肩が張らない。口縁直径に対して、概して器高は高いが、低く鉢形土器に近いものもある。壺形土器は口縁部が外反し、最大径が胴部の中央付近にある。胴部には2条ないしは3条の貼り付け突帯のあるものもある。底

部は尖底あるいは丸底である。直口壺形土器には器高5cmのものから20cm以上にもなる大型のものまである。口縁部は直立し、最大径は胴部上半にある。底部は尖底あるいは丸底である。鉢形土器は底部によって3つの型式に分かれる。1タイプは低い脚台を有するもので、口縁部は内彎するもの、開きながら直立するもの、くの字状に外反するものがある。2タイプは丸みをもった塊形の器形を呈し、丸底である。3タイプは平底で、口縁部は開きながら直立するものと、内彎するものがある。高環形土器は塊に近い環部に、短い筒を有する脚のついたものと、強く外反する浅い環部に脚台のつくものがあり、筒部と脚部の境付近に4つの円孔を有するものもある。蓋形土器は外に張り出す平たいつまみを持ち、なだらかに開きながら胴部に至る。

② 成川Ⅱ式

成川Ⅱ式は中津野遺跡土壌出土の土器を標式とするが、辻堂原遺跡溝状遺構1号に良好なセット関係が見出される。器種にはⅠ式のグループに小型丸底壺・手づくね土器・製塩土器が加わる。

かめ形土器はくの字状に外反する口縁部を持ち、最大径を口縁部にもつものと、胴部にもつものがある。頸部には台形あるいは半円形の突帯が巡るもの、段を有するもの、段・突帯とも有しないものがある。Ⅰ式に比較すると、口縁直径に対して器高が低い。壺形土器は口縁部が外反し、頸部で段をもつほどくびれ、丸底である。最大径は胴部のやや上半部にあり、ここに三条の三角突帯あるいは沈線の巡らされるものがある。小型丸底壺は胴部に比べて口縁部が長い。口縁部は開きながら直立するものと、直に近く立ち上がるものがあり、底部は丸底あるいは平底である。鉢形土器は塊形を呈し、丸底あるいは平底を呈するものと、くの字口縁あるいは直立する口縁部で、低い脚台をもつものがある。高環形土器の環部は、口縁部が強く外反し、脚台がつく。Ⅰ式に比べ環部が深い。蓋形土器には口縁部が外反する逆鉢形を呈するものと、ヘラなどによる短かい突起部をもつものがある。手づくね土器は平底をし、口縁部が直立するものがある。製塩土器は太い棒状脚台をもつものである。

③ 成川Ⅲ式

従来、指宿上層式と呼ばれていたもので、薩摩式あるいは成川式と呼ばれたもののほとんどこの形式である。成川式土器のほとんどを占める。この形式の一括資料は、入来遺跡・辻堂原遺跡などにみられ、須恵器を伴する住居もみられる。器種はⅡ式と同じであるが、手づくね土器・製塩土器はない。

かめ形土器は口縁部の形により大きく3種に分けられる。第1(Aタイプ)は底部からしだいに開きながらまっすぐ口縁部にのびるもので、低い脚台を有する。端部は平坦となり、口縁下部に断面三角あるいは半円形の貼り付け突帯がつく。これには左下がりあるいは右下がりのへら刻みが付される。第2(Bタイプ)は底部からしだいに開きながらまっすぐ口縁部にのび、口縁部でやや内彎する。他の要素は直立するものと同じである。第3(Cタイプ)の形態も前2者と同様であるが、口縁が外反するものである。Ⅰ式も外反する口縁をもつが、Ⅰ式がゆるやかに外反するのに対して、Ⅱ式の外反度はⅠ式より強い。頸部の貼り付け突帯はあるものとなないものがある。脚台は前2者と同じく低い。壺形土器の底部にはまだ丸底が残っているものの多くは平底である。平底には不安定な小さい底と、安定した底とがある。胴部の最大径は上半部にあるものと、中央あたりにあるも

のがあり、特殊なものとして下半部にあるものがある。頸部あるいは最大径の部分には1～3条の貼り付け突帯を有するものがあり、これには左下がり、あるいは格子状のへら刻みがみられる。なお、地域によって幅の広い断面半円形の貼り付け突帯がみられ、これには竹管文・半竹管文なども付されている。口縁部もまっすぐのびるものと、外反するものとがある。埴形土器は精製粘土を使用し、丹が上塗りされる。形態には大きく3種がみられる。ひとつは口縁部が頸部より強く外反するか内彎し、胴部の最大径が中央部あるいは上半部において平底を呈す（Aタイプ）。他方は胴部の最大径が下半部において、どしりとしたフラスコ状の器形を呈するもので、底部は平底あるいはあげ底みであるが、口縁部が頸部でくびれて外に開くか内彎するもの（B₁タイプ）と、胴部からゆるやかに外反しながら端部に至るもの（B₂タイプ）とがある。以上の2種が最大径の部分は丸みをもつのに対し、あとのひとつは、この部分が稜をもって曲がるもので、最大径が上半にあるものと、中央にあるものとがある。口縁部は頸部より強く外に開き、まっすぐのびるものと内彎するものがある（Cタイプ）。鉢形土器は底部の形態が大きく3種、つまり脚台のつくもの、平底のもの、丸底のものとする。



第26図 埴形土器の形態分類

脚台は浅いもので、口縁部がくの字状に外反するものと、マリ状を呈するものとがある。平底のものは、やや外に開きながらまっすぐのびるもの、まっすぐのびて口縁端付近がやや内反するものがある。丸底のものはマリ状を呈するもの、口縁部が強く外に屈曲するものがある。大きさ・形態とも多種多様である。高坏形土器は精製した粘土を用い、丹を上塗りする。坏部は埴形を呈するが、深いものと浅いものとがある。坏部の底と立ちあがりとの境は段を有するものと、この部分に凹線を引くものとがある。脚部は筒の短いもので、淵は外に広がる。こうした器種の他に、こしき形土器・把手付鉢形土器もあり、須恵器の器形を模した坏などもある。

これらに伴う須恵器にはⅠ式からⅢ式までである。

④ 成川Ⅲ式

成川Ⅲ式は、成川式土器のもっとも新しい一群で、村原（梅の原）遺跡の住居址群、とりわけその一括資料の多い3号・5号および6号住居址の資料を標式とする。その組成はかめ形土器・壺形土器・鉢形土器・埴形土器からなり、Ⅲ式に比べて違いがみられる。

かめ形土器はくの字状に外反する口縁部をもつが、中には逆L字状に近く曲がるものもみられる。頸部内面には明確な稜がみられ、低い脚台が付く。内面・外面ともハケなあるいはへらなで仕上げられる。壺形土器は頸部が細くくびれ、口縁部は強く外反する。胴中心部には一条あるいは五条の断面三角形の貼り付け突帯が巡らされ、この突帯にはきざみが付される。安定した平底である。鉢形土器は外に開きながらまっすぐ立ち上がる口縁をもち、丸底に近い平底である。埴形土器は外に開きながらまっすぐ立ち上がるもので、低い高台が付される。マリ形土器は口縁がやや内彎する。

4. ま と め

(1) 弥生時代後期の土器

南九州における弥生式土器の編年作業は、近年、入来遺跡の調査などによって、完成に近づきつつある。こうした中で、従来は、後期の土器として成川式土器があげられ、山ノ口式土器・一の宮式土器がそれに先行する中期末の土器と位置づけられていた。この位置づけのなかで、成川式土器がその主体を古墳時代に置くとなれば、弥生時代後期はまったく空白の期間となってしまふ。

ところが、1978年暮に調査がなされた金峰町松木壺遺跡の溝状遺構より出土した一括土器は、まさしくこの空白期間をうめてしまふ土器群であった。この土器群の中には北九州の三津式土器に類似した土器や、高三篇式土器に含まれる袋状口縁をもつ壺形土器などもあり、この一括土器を後期前半～中葉に位置づけることが可能であろう。

これらの土器群の特長を簡単に記せば次のようになる。かめ形土器は口縁内面に、はっきりした稜線をもつく字状口縁で、浅い御台は中空となる。壺形土器の口縁は強く外に屈曲するもので、中には口縁が二重になるものもある。底部は安定した平底である。かめ形土器・壺形土器以外の器形はほとんどない。この傾向は弥生時代中期・後期を通じての器種組成にもみられることで、南九州における弥生式土器の大きな特長といえる。

次にこの土器群と成川式土器との違いを記そう。第1にかめ形土器のく字状口縁の内面に松木壺のものがはっきりした稜線をもつのに対し、成川式土器には明瞭な稜線がないことである。第2に壺形土器の底部が松木壺のものは安定した平底であるのに対して、成川式土器では尖底・丸底あるいは不安定な平底である。第3に松木壺の土器組成が、かめ形土器・壺形土器のみであるのに対して、成川式土器では鉢形土器・高坏形土器・埴形土器などが加わる。このように松木壺遺跡の一括土器は、成川式土器と明確な一線を画することができる。そしてこれらは成川式土器に先行し、かめ形土器の特長などからして継続するものといえよう。

(2) 古式土師器

成川式土器の一部が古墳時代の土器であることは須恵器の相伴することからして確実である。すなわちⅢ式・Ⅳ式がそれである。Ⅰ式・Ⅱ式は須恵器を伴わない土器群であり、器種組成、形態変化などから考えても、Ⅲ式・Ⅳ式より古いことが明白である。また、Ⅰ式とⅡ式を比べると次のような理由からしてⅠ式が古いように思える。まず、辻堂原遺跡の溝状遺構1号はⅡ式を主体とするが、これに包含される土器群の中には少量のⅢ式も含まれており、Ⅱ式はⅢ式に先行し、また連続することが予想される。次にⅠ式の土器組成の中には小型丸底壺が含まれず、Ⅱ式になって初めて現われる。さらに、高坏形土器の中で口縁部が外反するタイプの器形変化は、浅いものから深いものへと移ることが知られており、この変化からしてもⅠ式が古い。

以上のように古墳時代中期以降の土器はⅢ式・Ⅳ式で埋められ、Ⅱ式は少なくとも古墳時代前期の土器であることが明らかである。Ⅰ式はどこまでさかのぼれるのだろうか。次に考えてみたい。

弥生時代と古墳時代をどこで区切るか、つまり古墳時代の開始をどこにもってくるかという問題は、重要でかつ基本的な問題でありながら、いまだに解決されていない。今日のように庶民基とか

け離れた巨大な墳墓が古くから出現することが明らかになれば、従来いわれていたように、古墳時代の開始を高塚古墳の出現期にもってくるといような答えではとうてい理解し難い。すなわち、全長50mを越えるような巨大墳は、弥生時代の首長墓とはまた違った観念でみねばならないが、岡山県盾築古墳・同黒宮古墳・奈良県纏向石塚古墳などからは弥生式土器が出土しており、庶民生活の変化とはとうてい対応し得ない。すなわち土器の変化と合致しないのであって、こうした点は高塚古墳の発生時期の遅れる遠隔地ではなおさらである。また、「土師氏に統率された土師部の製作した土器が土師器」だという歴史学的用語に対しても、考古学上の裏づけは難しい。

こうした中で、南九州と同じく弥生時代の伝統が長く残っているようにみえる東九州において、高橋徹氏は鏡片的廃棄という問題にふれ、そこに画期的な違いを見出している。このように各地方の特長を、各地でバラバラに記述していたのではいよいよ混乱をきわめようが、各地方でこうした変化をまとめあげ、それをまた横の関係で検討してみることも、他方では必要なことではないかと思える。

当地方においては土器編年の遅れから、生活あるいは文化要素の分析まで研究対象が延びていない。したがって、ここでは土器の変化だけから次のような位置づけを考えてみた。

成川式土器が弥生式土器に比べ、明らかな違いをみせることは前項に記した。他にも胎土中に多くの砂粒を含むなど若干の違いがみられる。弥生式土器から土師器への変化のなかでよくいわれる平底から丸底への変化というのは、松木麓遺跡の土器群から成川Ⅰ式への変化の中にも出ており、こうした変化がどこから発生するのかは別問題としても、全国的な波及の一端といえよう。しかしながら、成川式土器は他地方の土師器に比べれば、その器種・器形において多くの違いがみられ、地方色の強い土器とされるが、その一端はすでにⅠ式の中であらわれている。

器種という点では、以後の形式においてもいえることであるが、器台形土器を伴わないことが当地方の大きな特長といえよう。本県ではわずかに弥生時代後期に4点の器台をみるが、これも持ち込み品ということができよう。器形の点でも色々の違いを見出せる。まず、かめ形土器では九州北部・中四国・近畿あたりにみられる丸底と異なり、脚台を有するものだけである。これは関東あたりのものに形態の類似をみるが、この中間地帯に脚台のつくものがみられないことからすれば、南九州独自で弥生式土器の伝統を受け継いで出来あがった形態といえる。すなわち、弥生時代中期の入来式土器にみられる充実高台が、少しずつ変化し、後期にはややあげ底となり、Ⅰ式には深い中空の脚台となるのである。壺形土器は丸底という点、他地方のものに類似するが、器厚が厚く、器形も若干の違いがみられる。高環形土器も強く相反する環部など他地方のものに類似するが、脚台のつく点などに違いがみられる。また、整形技法においては内面をへらで削って薄く仕上げる技術は成川式土器にはみられない。内面のへら削りがみられるのは、やがて奈良時代になってからのことである。さらに、外面に叩きのみられるものもなく、ハケなであるいはへらなでのみである。また、Ⅰ式には増形土器が伴わず、その前段階のものと思われる直口壺が伴う。こうした直立した口縁で尖底の壺形土器は、隣接地域では宮崎県灰塚遺跡や熊本県津袋大塚遺跡などに類似の形態をみることができる。高環形土器では、平たい底部に直立する立ちあがりの(注25)つくり形態が奈良県座ノ庄遺跡などにみられる。脚台は異なるが口縁部が相反する浅い環部は、北九州の西新式土器・東九州の(注27)

安国寺式土器・瀬戸内の鬼川市Ⅲ式土器・畿内の第Ⅴ様式土器などに共通するものである。これらは大きくいえば弥生時代後期後半または終末期にあたる時期で、3世紀後半の年代を与えてよからうか。しかしながら、繰り返して述べるように当地方では、その特長からみる限り、弥生式土器の範ちゅうに入れるよりは古墳時代の土器に近い様相を持っていることも否定し難い。今後の問題点として残すが、ここで古式土器の項に含めたのも以上のような土器の特長をもつためである。この時期の遺跡は辻堂原遺跡以外にまだ本格的な調査がなされておらず、その類似品をみることの少ないのは、その広がりはまだ少なく、弥生時代と同じような小規模集落が営まれていたことを予想させる。なお、萩原遺跡の住居址における一括資料もⅠ式に含まれるものと思われる。

次にⅡ式について考えてみたい。この形式の大きな特長は埴形土器の出現である。埴形土器すなわち小型丸底壺の出現は、弥生式土器には見られない器形のひとつであり、さらに南九州から東北まで全国的に広く分布することから、古式土器のメルクマールとする考え方もある。こういう意味では、まさに古式土器そのものであるといってもよい。小型丸底壺の出自についてはまだ明白な答がないが、Ⅰ式に伴う直口壺の小形品とは、口縁部が直に立ちあがること、口縁部と胴部の境に明瞭な段をもつこと、底が不安定な尖底と丸底であることなど類似性も大きい。したがって、小型丸底壺の南九州における出現は、その前段階から予想されたことだったかもしれない。小型丸底壺の出自がどこであったにしてもその全国への伝播は早い。そして、この形態が次のⅢ式には出てこないことから考えれば、他地方における小型丸底壺の出土地を調べることによって、Ⅱ式の使用時期を想定できるように思える。ここでその一部を紹介しよう。熊本県杵臼奥野遺跡、同久保遺跡、佐賀県久蘇遺跡、福岡県赤水原遺跡、広島県金平遺跡、岡山県雄町遺跡、鳥取県福市遺跡、兵庫県門前遺跡、大阪府小若江北遺跡、同東奈良遺跡、奈良県平城宮址、福井県西山遺跡、東京都船田遺跡、千葉県我孫子中学校校庭遺跡、埼玉県五箇遺跡、同下加南遺跡、群馬県石田川遺跡、茨城県長岡遺跡、山形県中野遺跡、宮城県南小泉遺跡など。

さらに全国的に共通形態を示す高環形土器の坏部について比較すれば、深い坏部は東九州の守岡Ⅰ式・北九州の宮ノ前Ⅲ式・瀬戸内の酒津式土器・畿内の庄内式土器・東日本の五領式土器などに共通するものといえる。したがって、この年代を3世紀末～4世紀頃と考えたい。

この時期においても、南九州ではまだ古墳の発生をみないが、集落数はⅠ式に比較して増加しており、古墳時代中期に出現する古墳が物語る権力発生を予測することができる。

Ⅱ式に属するのは中津野遺跡・辻堂原遺跡・東原遺跡を挙げることができる。

(3) 古墳時代中期の土師器

成川式土器の出土する遺跡から須恵器が出土した例は古くから知られ、その報告に記載されたこともたびたびであったが、成川式土器が弥生式土器であるという前提のもとに、これらはすべて混在した遺物として扱われてきた。しかし、入来遺跡・辻堂原遺跡・川内市植平遺跡などの住居址に一括して出土し、鹿児島市釘田遺跡・同七社遺跡・萩原遺跡などでは溝状遺構や河川、あるいは包合層に共に含まれており、その共存関係は確実なものとなってきた。

ところで、本県における須恵器窯の発掘調査例は、現在のところ川内市鶴峯3号窯(7世紀後半)のみであって、この窯以外にはその所在すら確認されていない。また、須恵器の出土数も少なく、

その報告例は幾々たるものである。したがって、須恵器の編年作業はまだ糸口すらつかめていない現状である。須恵器を伴伴するⅢ式は、かめ形土器が直立する口縁をもち、甗形土器が不安定な平底であるという点では一致するが、他の器種あるいは形態の細部には若干の違いがみられる。また、伴伴する須恵器にも形式差がみられ、Ⅲ式のこうした違いは時期差とみなすことができよう。ここでⅢ式の細分化をする前に、県内出土の須恵器について簡単に述べてみよう。

先に述べたように、出土数が少ないために編年はむずかしいが、記述の都合上、仮に須恵器Ⅰ式からⅤ式までに分けて考えたい。Ⅰ式というのは大阪府陶器古窯址群で焼かれたもので、現在のところ、薩摩に1ヶ所、大隅に3ヶ所出土が知られている。辻堂原遺跡では表土の他に55号住居址・79号住居址・溝状遺構6号より多くの成川式土器とともに出土している。杯・高杯・かめである。串良町上小原古墳群からは完形品4点（たる形はそう1・はそう1・蓋杯1）が一括資料として出土しているが、^(注36)出土した遺構の性格は不明で、成川式土器も伴伴していない。大崎町横瀬古墳は水田の中にある前方後円墳で、その姿は県内随一のものであるが、ここの墳丘および堀から埴輪などとともにかめの破片が出土している。成川式土器は出土していない。あと1点、大隅から出土しているたる形はそうは、具体的な出土地が不明である。これらの須恵器は陶器古窯址群のⅠ期に該当するもので、ほぼ5世紀後半に位置づけてよからう。Ⅱ式の出土も少なく、辻堂原遺跡35号住居址（杯身）、吹上町宮内遺跡（台付有蓋甗）などにみられるのみであり、これは6世紀初頭頃であろう。次に入来遺跡（杯身・杯蓋・提把）^(注38)、下飯村大原・宮内遺跡（杯身・高杯・はそう）^(注39)、長島町白金崎古墳（杯身・杯蓋・増・高杯・高杯蓋）などの須恵器がⅢ式で、これは6世紀前半のものである。^(注40)Ⅳ式に該当するものは鹿児島市釘田遺跡、山川町成川遺跡（杯蓋）、村原（梅ノ原）遺跡（かめ・杯蓋）、吹上町石塚遺跡（高杯）、吹上町堀屋遺跡（はそう）、長島町白金崎古墳（平甗・壺・かめ）、長島町鬼塚古墳（杯身・杯蓋・高杯・甗）^(注41)、志布志町六月坂横穴（杯身・杯蓋）などに出土しており、その数量が増えている。これらは6世紀後半のものと考えられる。^(注42)7世紀になると鶴峯窯跡で焼かれるようになるが、いぜんとして出土数は少ない。^(注43)^(注44)

以上のように現在知られている須恵器の出土数はきわめて少ない。これは古くより須恵器生産の始まった畿内地方と距離的に離れているということもあるが、政治的にその影響が及ばなかったということもいえようし、風土的に受け入れる要素がなかった。つまり独自の意匠を用いたり、土師器においても独自のものを使ってきたように他地方の文化を背する風潮が残っていたということもいえよう。こうした状態に変化の起こるのが須恵器窯の出現する7世紀である。

以上述べてきた須恵器Ⅰ式からⅢ式までがここで述べる成川Ⅲ式に伴う須恵器である。前項で述べたようにⅢ式には色々の形態の違いがみられ、これが時期差であることも先に述べた。したがって、その細分化について検討してみたいが、その対象として住居址の切りあい関係が明確な辻堂原遺跡の資料を用いたいと思う。そのひとつは58号住居址と68号住居址の切りあい関係で、あとひとつは70号住居址と81号住居址の切りあい関係である。58号住居址と68号住居址では68号住居址が新しい。かめ形土器では58号住居址（以下住居址を省略する）にA・Oタイプがみられるのに対して、68号はA・Bタイプがある。そして、脚台は68号が概して低いのに対して、58号は高い。甗形土器では58号がまだ丸底に近い平底であるのに対して、68号では安

定した平底が高い比率を占めている。増形土器では68号で最大径がいちだんと下にさがり、頸部のくびれがほとんどなくなる。高環形土器では坏部の段に68号で凹線が出現している。このように58号のもっている各器種の要素はまだⅢ式に近いものであり、68号ではⅢ式の要素を全く失ったものといえる。したがって、58号にみられるかめCタイプはⅣ式に近いものでなく、Ⅲ式に近いものといえる。これは脚台が高いということからも首首できる。すなわち、かめ形土器の口縁部はⅠ式にみられるく字状口縁で貼り付け突帯を有さないものから、Ⅲ式ではこれに貼り付け突帯を有し、さらにⅢ式になると、まずまっすぐ立ちあがるAタイプの口縁が出現し、次に端部が内曲するBタイプのもも共存し、この時期に一時期外反するタイプが失なわれる。壺形土器の底部も尖底→丸底→平底という変化をこの切りあい関係は証拠づけている。増形土器ではBタイプの2種がみられ、B₁タイプがB₂タイプより古いことを示している。高環形土器の坏部では58号がA₁タイプであるのに対し、68号はA₁タイプ、B₁タイプ、B₂タイプがある。立ちあがりと底部の境がこれまで顕著な段を有していたのに対して、坏部が塊状を呈して段がなくなると、その境を示す所に凹線を施すようになる。以上のように58号と68号はⅢ式の最古形態と次の段階を示している。

70号住居址と81号住居址では70号住居址が新しい。かめ形土器には大きな違いはみられず、それぞれにAタイプ・Bタイプ・Cタイプがある。壺形土器も底部などには大きな違いがみられないが、81号になくて70号にあるものとして、最大径となる胴部中央が強く張って、口縁部が強く外に開くものがある。増形土器では81号がA₁・B₂タイプを所有するのに対して、70号はB₁タイプのみを有する。高環形土器にも大きな違いはないが、81号の脚部は裾が強く外反するため内部に線をもち、倒環状を呈するものもある。70号は壺形土器にみられるようにⅣ式に近い様相をもっているが、増形土器の変化は先の58号と68号の関係とは逆になってB₂タイプのほうが古くなっている。

辻堂原遺跡の集落は広大な範囲に広がっており、今回調査された吹上中学校用地はその一部分に過ぎない。ここでは成川Ⅲ式・Ⅳ式の溝はみつかったものの、これに伴う住居は少ない。それに反して成川Ⅲ式に該当する住居址はその8割以上を占め、切り合い状況は複雑である。もっとも多いのは5軒もの住居が切りあっている。ところでその年代幅はといえば、先に述べた成川Ⅲ式を5世紀前半までとすれば、そのあとからほぼ1500年近くに及ぶものと思われる。これはあとで述べるように成川Ⅳ式の年代がほぼ7世紀に比定されるからである。すなわち、58号住居址を成川Ⅲ式の最古に、70号住居址を成川Ⅳ式の最新にもってこれる。ところが先にも述べたように、増形土器のみを比較したとき最古のものとなつてきたものとまったく同じであるという矛盾が生じてくる。そこで、ここでは今回紹介しなかった辻堂原遺跡の他の住居址や、入来遺跡などとの比較を試み、こうした矛盾がなぜ生じてくるのか考えてみたい。

器種の中で、かめ形土器・壺形土器については変化が少なく、その前後関係についてはすでに58号住居址と68号住居址との切りあい関係のなかで述べたとおりである。鉢形土器には色々の種類をみるが、これは時期差というよりも同じ時期における形態の違いと考えたほうがよいように思える。というのは、すでに辻堂原遺跡の溝状遺構2号でみたように古い時期にも多様な形態がみ

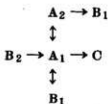
られ、また、住居址の一群にも多種のものを含むからである。高環形土器については先に述べたように稜をもつものが古いということは、Ⅲ式からの流れを考えたとき明白であろうと思うが、丹塗り高環のなかには環部の立ちあがりや底部との境から極単に強く外反するものがあって、これは古い部類には、はいらない。こうした高環形土器が釘田遺跡・指宿市新番所遺跡・成川遺跡・大槻占町城元遺跡など比較的新しいと考えられる遺跡より出土しているからである。また、凹縁をもつ環部には浅いものと深いものがあって、これは時期差と考えるので今少し比較検討してみたい。

辻堂原遺跡の成川Ⅲ式を出土する住居址のなかで、環部の浅い高環形土器を有するのは次の住居址である。21号・33号・35号・37号・46号・47号・48号・55号・61号・62号・64号・66号・68号・70号・71号・84号・88号。環部の深い高環形土器を有するのは次の住居址である。14号・15号・18号・26号・34号・39号・72号。また両者を含むのが12号・44号・57号・79号・81号の各住居址である。これをみたとく両者を含むものが少ないことは、高環形土器を1点しか含まない住居址が多いとはいえ、環部の浅い・深いは時期差としてとらえられる要素と思われる。こうした住居址のなかで、須恵器を伴う住居址はすべて浅い環部の高環形土器が出土しており、入来遺跡の住居址に伴う高環形土器も環部が浅い。深いとされる住居址のなかで特長的な要因として、柱痕を残す住居が3軒(14号・18号・34号)含まれることをあげれる。その他の住居においても切りあい関係においては新しいものが多い。したがって、こうした環部の深いものは高環形土器の中では新しい部類にはいる。この年代を想定すると、入来遺跡の住居址が6世紀中頃であることから考えて、少なくとも環部の浅いものは6世紀中頃まで続くと考えられる。また、辻堂原遺跡の集落を考えた時、当集落は断絶せずに連続するものと考えられ、あとで述べるように成川Ⅳ式には高環形土器・埴形土器が伴わないことからして環部の深いものを6世紀後半と考えたい。とすれば、環部の浅いものは5世紀中頃以降、6世紀中頃までのものと考えることができよう。環部の浅いものは約1世紀の年代幅を与えられるが、この形態の高環形土器が少なくとも17軒に出土していることから考えれば当然のことともいえる。このように高環形土器は環部が浅く、すそ広りの脚台が付くものから、環部が深いものに変わり、次の段階には次第に環・マリの出現へと変わってくるのであろう。

成川Ⅲ式土器の変化は以上述べたようにきわめて小さい。ところが、その変化のいちぢるしい器種として埴形土器がある。埴形土器は成川Ⅲ式になって全国的波及のひとつとして出現し、Ⅲ式になると精製粘土を使用して丹塗り土器となる。その形態は安定した平底を有することに共通性を見出せるものの、最大径を上半部にもつのか、中央部か、下半部かという点、あるいは最大径部分が丸みをもつか、稜をもつかという点に差異を見出せる。ここではこれを先に分けた分類にしたがって住居別に考えてみたい。まず、最大径が中央部にあって口縁部が外反する形態(A₁タイプ)は、14号・18号・50号・55号・67号・71号・81号・82号・88号住居址に出土している。次に最大径が上半部にあって口縁部が外反する形態(A₂タイプ)は15号・39号・56号・63号・64号・84号・85号住居址に出土している。最大径が下半部にあって口縁部が外反する形態(B₁タイプ)は48号・57号・58号・62号・70号・89号住居址に出土している。最大径が下半部にあって胴部からゆるやかに外反する形態(B₂タイプ)は68号・81号・90

号住居址にみられる。さらに、最大径が轡をもち口縁部が外反する形態（Cタイプ）は12号・44号・47号・50号・55号・82号住居址に出土している。こうした中で住居址の柱穴に柱痕跡の残る、いわゆる最新の住居址（14号・18号・22号・34号・44号）に出土するのはA₁タイプとCタイプであり、入来遺跡住居址出土の埴形土器もA₁タイプである。すなわち14号・18号住居址においては高環形土器の坏部が深いものとA₁タイプが共伴し、入来遺跡の高環形土器・埴形土器との関係を見ると、14号・18号住居址の頃を6世紀後半と考えることができようか。したがって、A₁タイプは6世紀中頃～後半とすることができよう。

ここで、これら5タイプを出土する住居の切りあい関係を調べてみよう。18号住居址（A₁）は84号住居址（A₂）より新しい。47号住居址（C）は89号住居址（B₁）より新しい。68号住居址（B₂）は58号住居址（B₁）より新しい。82号住居址（A₁・C）は62号住居址（B₁）より新しい。63号住居址（A₂）は64号住居址（A₂）より新しい。67号住居址（A₁）は68号住居址（B₂）より新しい。70号住居址（B₁）は81号住居址（A₁・B₂）・85号住居址（A₂）より新しい。55号住居址（A₁・C）・56号住居址（A₂）は71号住居址（A₁）より新しい。56号住居址（A₂）は81号住居址（A₁・B₂）より新しい。すなわち、63号住居址と64号住居址の関係は同一種類であるから除外するとして、他の関係から次のような移動表ができる。



以上のように、きわめて複雑な関係を示している。ところが高環形土器との関係で、高環形土器の坏部の深いもののみを出土する住居址にはどのタイプがあるか調べてみれば、これはA₁・A₂タイプに限定され、先に述べたようにBタイプよりAタイプが新しうである。形態的にみても成川Ⅱ式の埴形土器は、下半部に重心をもっており、その可能性は強い。また、Aタイプの埴形土器には胴部に一孔を有するものがみられる。吉永正史氏の調査によれば、こうした形態の埴形土器を出土している遺跡は6遺跡を数えるが、これは形態からいって須恵器のはそを模したものとみることができよう。とすれば、これは須恵器Ⅲ式のものに近いから6世紀中頃のものと見え、Aタイプの時期も同じ頃に想定されるが、これは入来遺跡の共伴関係とも矛盾しない。

古墳時代中期は大隅半島に古墳の築かれ始められた時期であり、その集落も増大する時期である。そういう時期の土器である成川Ⅱ式は以上述べたごとく、きわめて細分化がみづかしい。今後、新資料によって細かい分類の試みられねばならない土器であろう。

(4) 古墳時代後期の土師器

北九州では奈良・平安時代の土師器（特に坏・埴）について、太宰府あるいは南バイパスなどの調査でかなり細かく編年ができていいる。ところが南九州ではこうした時期の編年がまったくできていない。最近、萩原遺跡・石峯遺跡・山神遺跡・薩摩国分寺跡などではかなりの資料化がされてお

り、近い将来その糸口がつかめるかもしれない。こうした時期の土師器には、かめの他に環・壺・皿などの器種がみられるのみで、壺・鉢・高環などはきわめて少ない。そして、かめの口縁部は強く外に反っており、内面の頸部以下には粗いへら削りが施され、脚台はつかず、丸底を呈する。例卵形の長細いものと、球形を呈するものがある。

さて、こうしたかめへの変化がどのようにして行われるのか、奈良・平安時代のかめの移り変わりも不明な現在では推し測ることができない。しかし、成川式土器の移り変わりと、奈良・平安時代のかめの形態から考えれば村原遺跡3号・5号・6号住居址の一括資料はそれに先行する土器群といえる。その第1の理由は、マリ形土器・壺形土器の出現である。壺の出現は、筑前・筑後地方窯跡の調査ではⅣ期（7世紀後半）とされている。ところが、豊前国天観寺山古窯跡群ではⅣa期、つまり6世紀後半にさかのぼる可能性があるとされる^(注47)。したがって、村原遺跡3号住居址の年代は7世紀以降と考えられる。第2の理由は、マリ・壺^(注48)の出現と逆に、鉢形土器・高環形土器の消滅あるいは減少化は、のちの土師器にみられる土器組成に似ている。これは成川Ⅲ式までの土器組成とも相違をみせている。第3の理由は、かめ形土器の口縁にみられる強い外反化である。これはのちの土師器に比べると脚台の有無、口縁端部の厚さ、頸部以下の内面調整に違いをみせるものの、その形態は似ている。第4の理由は、壺形土器の底である。成川式土器の壺の底は、端的に記すならば尖底→丸底→不安定な平底→安定した平底という変遷を示す。成川Ⅳ式はこの最終段階に相当する。第5の理由は村原遺跡の住居群である。ここでは6基の住居が検出されており、ここでとりあげた3基の住居以外の出土土器は少ない。しかし、1号および2号住居址にはⅣ式あるいはⅤ式にあたる須恵器を伴出している。これらは同一台地上にある住居址で、その切りあい関係の少ないことから考えれば、若干の新古はあったとしても、ほぼ同時期、つまり7世紀の住居群である可能性が高い。したがって、成川Ⅳ式を古墳時代後期、7世紀の土師器に位置づけたい。

5. さいごに

以上述べてきたように、我々が呼んでいる成川式土器には3世紀のものから7世紀のものまで、幅広いものが含まれている。こうしたものをひとつの名で呼ぶことは今日のように細分化の進む時代においては、当を得ないことと思われる。したがって、筆者はここで分けた分類を前章で述べたように時期差と考え、その標式遺跡名をとり次のような名称で呼ぶことを提案したい。Ⅰ式——辻堂原式、Ⅱ式——中津野式、Ⅲ式——笹貫式、Ⅳ式——柘原式。笹貫式の名称はすでに河川氏をはじめとして過去に呼ばれたことがある。これはセット関係をなしていなかったものの、ここでいうⅣ式を指しているものであり、笹貫遺跡では明確なセット関係を示す遺構が出ていないが、従来の呼び方にならない使用することとした。

この形式名はその年代幅からしても、まだ十分なものとはいえず、今後さらに細分化の必要などというまでもない。しかしながら先学諸氏によって指摘されてきたように、成川式土器の停滞性は否定し難く、特に笹貫式土器のかめ・壺といった器種にはいじりやすい。そして、これは形態のみでなく、整形技法・使用胎土などにもおよび、完形品でなかった場合、形式名を決定し難くなる可能性は大きい。今後に残された課題は、細分化しても破片でわかる違いをみつけることであろう。

最後に、各形式の年代および他地方における同時期の土器形式名を表にした。

	鹿兒島	北九州	瀬戸内	山陰	畿内	東日本
	松木園	下大隈	上 東 鬼川市Ⅱ	九 重	第Ⅴ様式	前野町
	辻堂原	西 新	才の町Ⅰ	鷺尾Ⅰ	纏向Ⅰ	
300AD	中 津 野	宮ノ前Ⅱ	酒 津	鷺尾Ⅱ	庄 内	五
		柏 田Ⅱ	下 田 所	小 谷 ………		
		柏 田Ⅲ	亀川上層			
		湯納D5	幡多庵寺下層Ⅱ		布	
		野方1001	走 出			留
400AD	笹				和泉	
500AD	貫				鬼 高	
600AD	梅ノ原					
700AD						

本稿では編年に主眼を置いたため、各形式における地域性、あるいは広がりなどにはふれなかった。最近、佐賀県二塚山遺跡群における成川式土器の出土、中村明蔵氏における鹿児島湾勢力圏の掘起など注目すべき問題も提示されている。^(註49) こうした問題についてはまた稿を改めてふれてみたい。^(註50)

注

- (1) 乗安和二「弥生時代(西日本)」『考古学ジャーナル』№94 1974年
 - (2) 横口達也「九州の弥生土器」『世界陶磁全集』1 1979年
 - (3) 弥生時代とする意見は、1960年代までは一般的であったが、1970年代からは概説書等を除き、ほとんどない。ところが実年代は5世紀頃としても、いぜんとして弥生式土器と呼ぶ論考・報告書等は多く見られる。
 - (4) 河口貞徳「土器」『成川遺跡』(『埋蔵文化財発掘調査報告』第七) 1974年
 - (5) 河口貞徳「土器」『成川遺跡』(『埋蔵文化財発掘調査報告』第七) 1974年
- 66ページ
- (6) 濱田耕作「藤原国揖保郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第六冊 1921年

- (7) 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号
1952年
- (8) 河口貞徳・出口浩「第一次花熟里遺跡調査報告」『鹿児島考古』第5号 1971年
- (9) 出口浩「吹上町中原発見の弥生式土器について」『鹿児島考古』第6号 1972年
- (10) 河口貞徳「銀形石の祖形」『鹿児島考古』第8号 1973年
河口貞徳他『大原・宮蔵遺跡』下飯村教育委員会 1974年
- (11) 池畑耕一・弥栄久志『辻堂原遺跡』吹上町教育委員会 1977年
- (12) 池畑耕一「南九州における弥生時代終末期から古墳時代初期の土器——辻堂原I類の位置づけ」研究発表要旨 1978年
- (13) 平田信芳他『萩原遺跡』給良町教育委員会 1978年
- (14) 平田信芳「隼人の土器」『隼人文化』5号 1979年
- (15) 新東晃一・中島哲郎・牛之浜修『村原(柊ノ原)遺跡』加世田市教育委員会 1977年
- (16) 注(7)と同じ
- (17) 河口貞徳「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 1976年
- (18) 上村俊雄・出口浩「第二次花熟里遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』第7号 1973年
- (19) 注(11)と同じ
- (20) 注(13)と同じ
- (21) 河口・河野・池水・上村・林・出口「永山遺跡」『鹿児島考古』第8号 1973年
- (22) 諏訪昭千代・弥栄久志「東原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』00
1978年
- (23) 本田道輝氏等によって調査され、本号にその報告がされている。
- (24) 高橋徹「廃棄された鏡片——豊後における弥生時代の終焉」『古文化談叢』第6集
1979年
- (25) 宮崎県立博物館所蔵
- (26) 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 1979年
- (27) 伊達宗泰「窪之庄遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14輯 1961年
窪之庄遺跡の土器について、杉原庄介氏は第5様式と庄内式との間におき、第5様式亜式と呼ぶ。しかし、弥生式土器に含めるのか、土師器とするかは決断していない。
大塚初重編『シンポジウム弥生時代の考古学』学生社 1973年
- (28) 森浩一・伊達宗泰「生活の変化——土器」『日本の考古学』V 1966年
- (29) 注(28)のなかで「現在知られている資料によって、小形丸底甕の出現をたどると(省略)西方の遺跡のほうが一段階古いことが知られるのであって、大和やその周辺で発生し、東方と西方に伝播したと考えることは不可能である」とされている。
- (30) 註(6)、註(7)の笹貫遺跡など
- (31) 1976年8月に、河口貞徳氏等によって調査された。

- (32) 1976年に県文化課で調査された。
- (33) 出口浩「吉野町七社遺跡」『鹿兒島考古』第8号 1973年
- (34) 平田信芳他『萩原遺跡(2)』給良町教育委員会 1980年
- (35) 河口・小田他『薩摩国府跡・薩摩国分寺跡』鹿兒島県教育委員会 1975年
- (36) 立神次郎・中村耕治「鹿兒島県串良町上小原古墳群内出土の古式須恵器」『古文化談叢』第5集 1978年
- (37) 1978年に県文化課で調査された。
- (38) 宮田道照「宮内遺跡」『ふきあげ』第7号 1969年
- (39) 註(10)の報告書
- (40) 池水寛治「鹿兒島県長島町小浜崎古墳群(Ⅱ)」『鹿兒島考古』第6号 1972年
- (41) 河口貞徳・上村俊雄他「入来遺跡調査概要 — 支石墓研究の一環として」『鹿兒島考古』第11号 1976年
- (42) 辻正徳「先史時代」『吹上町郷土史』上巻 1969年
- (43) 註(40)と同じ
- (44) 上村俊雄「先史時代」『志布志町誌』上巻 1972年
- (45) 口縁直径1に対して、内面の高さ0.5以下を浅い、それ以上を深いとする。
- (46) 吉永正史「入道遺跡」『鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書』00 1978年
- (47) 坂詰秀一編『筑前平田縣跡』1974年
- (48) 小田富士雄『天觀寺山縣跡群』1977年
- (49) 石原喜佐雄・七田忠昭編『二塚山』(『佐賀県文化財調査報告書』第46集) 1979年
- (50) 中村明蔵「古代における鹿兒島湾沿岸部勢力について — 成川遺跡の存在をめぐって」『隼人文化』第6号 1979年

以上の他に次のような文献を参考にした。

柳瀬・江見・中野『川入・上東』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16) 1977年

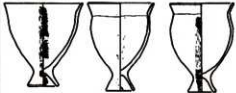
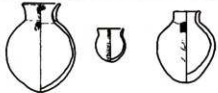
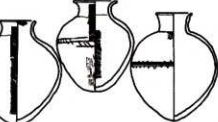
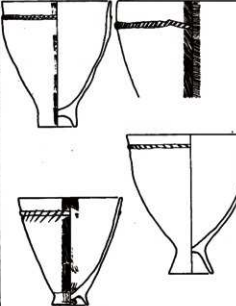
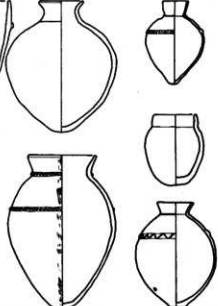
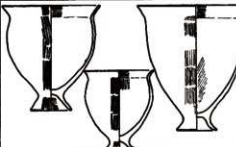
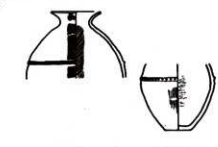
羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ — 安国寺式土器の再検討」『古文化談叢』第5集 1978年

表紙土器解説

河 口 貞 徳

溝辺町石峰遺跡出土の平格式土器。縄文時代前期前半に位置するもので、国分市平格貝塚出土の土器を標式として名づけられた。早期に発生した幾何学文と、縄文が併用して施文され、前期初頭の手向山式に続き、この地方における前期の特徴である、各系統の土器型式の融合現象が顕著で、更にこの特徴は、後続する塞ノ神A式に引きつがれている。

口径21cm、高さ22cm、底径10cmで小型であるが、形がよく整い、文様も美しく、平格式土器中の逸品である。伴出の炭素測定による年代は、 7910 ± 115 Y・B・Pである。

	かめ形土器	壺形土器
辻堂原式		
中津野式		
笹貫式		
樽ノ原式		

第27図 成川式土器の細分編年試案図

増形土器	鉢形土器	高坏形土器	蓋形の土器 その他
	